
壊れた世界

薙月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた世界

【Nコード】

N3371I

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

少年は神になる。しかし、神は何時までも「神」で居られるのだろうか。

壊れた世界

薙月 桜華

長年の研究により人工知能と人工生命の研究は重なり合い、新たな生命を作り出した。チューリングテストを突破したその生命はアニメと呼ばれた。

このアニメは仮想空間内に生きる人間である。つまり、アニメを用いれば仮想空間にもう一つの人間の世界を作り上げることが可能となった。

新たな生命として誕生したアニメは災害シミュレーションや、いわゆるゴッドゲームの住人として世の中で使用されるようになった。このアニメを用いれば、人間は神になれるかもしれない。

薄暗い部屋の中、ディスプレイの淡い光が周囲を照らしている。何も表示されて居ないディスプレイの前にはヘッドマウントディスプレイを着けた男が居る。両腕にパッドを着けており、パッドから伸びたコードが暗闇の中に通じている。

輝はディスプレイ越しに見える世界に感嘆していた。そこには現実存在しないだろう島と人間が存在する。

ここはゲームの世界。世界を創造して、中身がアニメである人間をその世界に住まわせる。そうすることで、彼らの生活を覗き見るものである。また、プレイヤーは神として住人からの「神頼み」を叶える事が出来る。このあたりはゴッドゲームと変わらない。神と人間が近い存在であったということだろうか。

プレイヤーは神である。故に悪いことも良いこともその中で出来た。ただそこは自由に満ちていた。

輝は世界を見渡す。彼が創造した世界は生まれて間もない。しかし、そうであるが故に人間の手が加わって居ない世界を見て驚いた。このような景色は彼の身近には無い。視点を変えて地上近くに下りる。視点だけであり、実際に空間内で人物や物体が移動しているわけではない。

現実世界の陸地にはいつか終りがあるように、この世界の端には必ず陸の終りと海が見渡せた。輝は海側から陸を見る。陸には手付かずの木々が生い茂っていた。

すると、一瞬視界を何か動くものが通り過ぎた。輝が周りを見ると、そこには人間が居た。世界を創造したときに一緒に住ませたものたちの一人だろう。

輝は視点を動かして陸地を進んでいく。二つの山とその間を流れる川。おおざっぱに作成したわりにはそれらしい風景が出来上がっていた。川の近くに行けば水の流れる音が聞こえる。足音に視点を変更すれば動物が居た。こちらで作成したときに放ったものである。輝は視点をズームにして上空へと上っていく。他にも遺跡があり、昔この島にも人間が居たことを伝える。

輝が辺りを見ると、突然画面が揺れた。次の瞬間にはヘッドマウントディスプレイを脱がされていた。

「こら、輝。こんなに遅くまで起きてないで寝なさい。」

いつの間にか部屋の明かりがついていた。そして、背後には母親が立っている。彼が見上げた母親の顔は光が当たらず影の部分が多くなっていた。それを見た彼は恐怖ですぐに椅子から立ち上がる。

「早く寝ないと朝起きられないわよ。」

母親はヘッドマウントディスプレイを輝に返すと部屋を出て行った。彼は突然の事だったためか、何も言えずにその光景を見るのみだ。時計を見ればもうすぐ日付が変わろうとしていた。世界を見ているだけでこんなにも時間が過ぎるものだろうか。いや、どうしようかと考えながら世界を作ったから時間がかかったのかもしれない。彼は母親が居ない一人暮らしならば朝までやっていたのと思った。

次の日の午後。輝は自分の部屋に勢い良く入る。鞆をベッドに放り投げると、すぐにコンピュータの電源を入れた。机の上に無造作に置かれているパッドを両腕に着けて、ヘッドマウントディスプレイを着ける。

すぐに輝の目の前に世界が広がった。すると、画面の下に何か表示される。選択すると、住人が助けを呼んでいるらしい。つまり、この世界の「神頼み」である。対応しても良いし知らん振りをしても良い。それはプレイヤーである神に任されている。彼は複数ある中から一つを選択してみた。内容はある母親からで、「森から帰ってきていない息子を無事返して欲しい」ということらしい。それは他よりも困った内容のためか、彼は選択せざるおえないと思った。すると、神頼みが行われた場所に移動する。移動したら神頼みをした本人が何か言うわけでは無いが、詳しい内容を確認することが出来た。また、それとともにポップアップウィンドウが表示された。ウィンドウには「強制的に実態モードに変更します」と書かれている。「OK」を押すと突然太陽の光や風を感じた。モードが変わったらしいが良く分からないのですぐにヘッドマウントディスプレイを外して説明書を見る。

説明書には「実態モード」とは神の姿で自由に世界を移動できるモードだと書いてある。その状態で人間に会うと相手は神であるとわかるらしい。

輝は再度ヘッドマウントディスプレイを被る。彼は首を動かして身体を見た。すると、彼自身が白い服を着ていることがわかった。それとともに周りから声が聞こえてきた。

「あ、神様だ。」

輝が地上を見れば子供たちが集まってきた。そういえば、いまだ空中に停止したままであった。彼は子供たちに手を振ると、そのまま森へ移動を開始した。

輝は少し高度を下げると、森をくまなく見ていく。途中で男の子を探しているらしい一団を見つけた。彼は男の子を見つけたらこの人たちに差し出せば済むのではないかと思った。

広大な森の中から一人の子供を捜すのは輝にも辛い作業となった。それとともにこれほど森を大きくしなくても良かったと思った。神も意外と面倒である。

しばらく探していると、木々の間に座り込んで天を仰いでいる男の子を見つけた。

「お、居た居た。」

輝は彼の前に降り立つ。すると、すぐに男の子は彼を見て驚いた。あまりに突然だったためか男の子は輝から少し遠ざかる。

「か、神様だ。」

輝は男の子に近づき、手を差し伸べた。

「君のお母さんが心配していた。途中までだが返してやろう。」

輝は男の子が手を掴むとその場に立たせた。触れた手は妙に生々しくて、温度があつた。まるで生きているみたいに感じた。いや、実際にこの世界で生きているのだから「生きている」のだろう。

「さてと、帰ろうか。」

輝は男の子を抱きかかえると、ゆっくりと宙に浮いた。驚き騒ぐ男の子をよそに森の中を村に向かって移動する。

やがて、先ほど見た一団を見つけた。輝は彼らの前に降り立つ。

「すまないが、彼を保護して欲しい。」

輝は驚く一団を気にせず、男の子を渡した。すると、ウィンドウが表示されて、「神頼み」が叶えられた事を知らされる。正確にはまだ無事に帰して居ないので終わって居ないような気もするが、一応の終りということだろう。

輝はそのまま上空へと上っていく。地上から何か声が聞こえるので手を振った。彼は地上に居る人が米粒大の大きさになったとき、「実態モード」を終了して元の視点のみになった。こちらのほうが変に五感を刺激せず動きやすい。

輝はそれから世界に住む人間の一人の生活を追跡してみたり、太陽が沈む様を見たりした。前者はストーカーと認識されそうであるが、神だから大丈夫だと言い訳をして納得する。

輝がヘッドマウントディスプレイを外したときには既に午後七時を回っていた。そろそろ母親が「ご飯」という単語を連呼し始める頃なのでさっさと対応することにした。

夕食後もゲームを始めたが、とろとろと世界が進む形に飽きてきた。そこで、時間を早めてみる。魚や動物の飼育シミュレーションソフトでも時間を早める機能があるのでそれと同じようなものだろう。すぐに人々の動きが素早くなり、村は少しずつであるが変化を見せていく。人口の増加、技術の進歩。おおよそ人類が経験したことをそのまま同じように体験していく。

「早く寝なさい。」

ヘッドマウントディスプレイを通り抜けて聞こえた母親の声。輝は装着したまま応える。あんまり良い態度では無いが、再度着けるのが面倒だ。結果、あっという間に輝にとっての現実時間も過ぎてしまったようだ。ただ、世界を眺めているだけだった。そこに、自分には無い何かがあるからかもしれない。

それから毎日飽きずにゲームをした。何個も「神頼み」を叶えた。住人たちも技術を見につけてさらに輝たちに近づいていく。

しかし、問題はある日突然起きた。輝がゲームを起動して遊んでいるとき、何故か実態モードへ変更できないことに気付く。何か良く分からないエラーメッセージを表示するだけで彼には対処しようが無い。「神頼み」からの強制モード変更を試みたが同じくエラーメッセージが表示されて変更できない。すぐに、公式サイトにアクセスしてサポート掲示板を見ていくが同じ症状になったものは居ない。メーカーに直接問い合わせしてみると「一部ファイルが破損している可能性がある」という回答を得た。解決策は再インストールのみらしい。セーブデータを移動すれば今ある世界を引き継げる可能性があると言われた。何処までも可能性である。

輝は仕方なくセーブデータを別のところに退避して、再インストールをした。そして、セーブデータを上書きしてゲームを起動してみる。すると、正常に認識してゲームが始まった。しかし、再インストールする前と同じだった。やはりエラーが出て「実態モード」に出来ない。セーブデータ部分が破損しているようだ。

輝はヘッドマウントディスプレイとパッドを外す。ため息をつきながら自分のベッドにダイブした。そして、仰向けになって天井をみる。もう、これまで自分が作り上げた世界に入り込むことが出来ないのだ。ただ、見下ろすだけの世界となってしまった。

輝は目をつむり、ゆっくりと息を吐く。見下ろすだけの世界、見下ろすだけの世界、見下ろすだけの世界、見下ろすだけの……。

「まるでこの世界と同じじゃないか。」

輝は目を見開き起き上がる。そして、今自分が言ったことを全力で否定しようとした。この世界にも「神」は存在するかもしれないのだ。しかし、彼はそう思うにつれて自分たち人間が勝手に考えているだけなのではないかとも思った。ゲーム内のように実態として見えないのだ。今も居る居ないなど分かるはずも無い。

輝は大きく息を吐くと、横になって身体を小さく丸めた。

この世界もまた「神」が触れられない場所になってしまったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371i/>

壊れた世界

2011年2月11日23時55分発行